

六 廿 化



3

俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

山田六甲

立春大吉とりあへず笑とこか
紙漉の手風呂の湯気も弱まりぬ
雪しまき六甲の月かき消して
雪女六甲に来て泣いてゐし
木の肌はどれも年寄春近し
落羽松楽勝と聞き春待つか
日脚伸ぶ丘の芝生の傾きに
雨しづく冬芽なかなか手放さず
線香を束ねて焚かば風花す
沈丁の目覚めうながせ夜の風

冴返る城へ六人集ひ来し
滝凍ててまはりの岩の潤はず
仏滅の次は大安笹子鳴く
散り梅に縁取られたる潦
冬川や夜は窓から灯をもらひ
オリオンの大きく位置を曲げにけり
春草や山羊の食み跡土俵なる
大寒や雪平鍋に粥沸いて
刈りあげし若布のぬめる光りかな
眼下なる耕せし田の紫に

春草に馬の鼻息かかりけり
冷や汗のごとくに氷柱解けはじむ
日暮鴨われを汀に佇ます
笛鳴きの夕日に姿現しぬ
薄氷やけものの消えし石ぬれて
帯を解くごとくに氷柱解けにけり
雁帰る二神山のどんよりと
寒鯉を粉々にして風去りぬ
凍鯉の背中を雲の過ぎにけり
寒鯉の紅さざ波が碎きけり

寒鯉に沈んでゆけるネツクレス
寒鯉を見に来てくれてありがとう
寒鯉に身じろぎもせぬ我の影
寒鯉の影を離るることもなし
負け猫に添寝男の子守歌
鳴は餌を光の中に奪ひ合ふ
蠟梅の花をつついて鳥となる
走り根は鰐のごとくに春を待つ
痩せ水に寒苦の声を聞きにけり

手探りや暮の帳の白障子

松本文一郎

曇天の鴉黒ぐる冬に入る

動かざるもの一つや冬の星

手探りや暮の帳の白障子

落葉踏む乾きし音の付き来ては

損切りや頭痛薬なる菊脛

てさぐりやくれのどぼりのしろしろうじ まつもとがんとしろう

あつという間に暮れてしまった冬の夕暮れ。明かりを点す前の薄暗くなった部屋で障子明かりに手探り状態でしばらく過ごす。夕暮れから電灯を点するまでのしばらくを薄闇にすごしている実感を淡々とつたえている。これこそ味わう句とすべき作品。

※ただし文一郎さんが実生活では眼の手術を受けられたが、個人的事情を下敷きにして作品を評価したり鑑賞しては作品に失礼である。ちなみに連載の「句集一筆」は受贈句集を読めないのお休みとなる。

雪 卿 集

風呂吹き

貝森光洋

風呂吹きにほどよき厚さありにけり
青首大根天下の形勢眺めおり
赤蕪うしろ姿の妻ににて
糠床に宥めて寝かす沢庵漬
白菜の輪切りに志功の眼鏡かな

紅 葉

永田万年青

銀杏の葉くるくる回り始めたる
びつしりと幹に苔むす紅葉かな
須磨浦や眼下に紅葉沖に舟
寒風を笑ひ飛ばせる子どもかな
自転車のよろけつつ行く年の暮

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

ぴかぴか

筒井八重子

七尾の冬鯉姿見せにけり
尾鱗のみ動かしゐたる冬の鯉
寒の鯉投げやる餌をぱくつきぬ
風の中水鳥むつみ泳ぎけり
百合鷗太陽受けてぴかぴかぴかと

冬の朝

出口

誠

冬の朝旧街道は静かなり
冬紅葉朝日の中に沈みをり
冬の日や子どもの手紙に泣き出して
手跡じんじんじんと寒夜かな
寒がらす寄り添ひながら雲に消ゆ

蛭雪譚 六甲

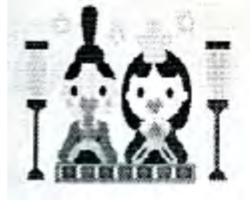


二十五年三月号選後に

風呂吹きにほどよき厚さありにけり

貝森 光洋

風呂吹きとは大根や蕪などを柔らかく茹で、その熱いうちに練り味噌を塗って食べる料理。行事としては神戸市北区淡河（おうご）町東畑の滝宮神社の滝宮大神と不動明王を祀る祭礼で古くから二十四節氣のひとつ、大雪（たいせつ）にあたる12月7日に行われる。村人の無病息災、特に中風や悪疫にならないことを祈り、祭主による滝宮大神への祝詞奏上と不動明王への読経以外は特に祭事らしい祭事は行われず神事と仏事が併せて行われることと、参拝者に振舞われるふろふき大根は、近隣の村々には見当たらない珍しいものという。こういう行事が全国で行われているのだろう。もちろん行事だけでなく、家庭でも寒い夜の料理として食べる。掲句の「ほどよき厚さ」は分厚すぎても薄くても風呂吹きの味を損なう。「ほどよきあつさ」はおそらく「ほどよき熱さ」もかけてあるのである。本来は「風呂吹き大根」だがトウガンなども使うことがありその場合は単に「風呂吹き」というのだそうだ。



ところで風呂吹き風呂吹きの語源はどこから来たのかと「ウイキペディア」で調べてみたら「名前の由来には諸説あり、一説によると、漆器職人が冬になると漆の乾きが悪くて困っていたところ、ある僧から風呂風呂（漆器の貯蔵室のこと）に大根のゆで汁を吹き込み、そこで乾かすとよいと教えられ、その通りにするとうまくいった。この時、大量のゆで汁を取るため、ゆでた大根も大量に余ったので近所に配った。すると、これがおいしいと評判になり、風呂風呂にゆで汁を吹き込んだ残りの大根であることから、「風呂吹き大根」の名前が生まれた、というもの。ただし「風呂」とは本来、蒸風呂のことを指し、蒸気を満たした「室（むろ）」が語源であることを考えると、上の説は前後が逆転している。もともと漆器の乾燥室である風呂風呂に湿気を与えるために沸かす湯が勿体ないため、大根を茹でるのに使ったという説のほうが信憑性は高い」とあった。選者もそう思う。前説では漆が乾かない。

六花集

学僧に紅葉散り敷く径讓る
落ちる陽と短き逢瀬芒原
冬銀河永遠に続くよ夫の留守
空耳に永夫の足音霜の夜
新年に背を向けて旅支度かな
蜂凍てて光る眼は生きても
四五台のブルの捻りや年の
マスクして思ひ出せずに挨拶
七色の結露を溶かす初日かな
太陽のやうな主治医や去年今

平居 濤子

大内 幸子

池田喜代持

地下を出て遊ぶ風あり冬帽子
塵少し立てて匂ひたり畳替
小銭かからふく財布年用意
年取の又も大事な日なりけり
妻に手を籍しゐて冬日すぐりに落つ